

大いに語る!! 「議員懇談会」

ひきこもりをテーマに議員懇談会が9月4日、トトロの家で行われた。津山市議の秋久憲司、安東伸昭、三浦ひらくの3氏とキビの会員ら10人が当事者とその家族に対する受け皿、相談体制、居場所づくり、高齢化、行政の対応のあり方やボランティアについて、それぞれの立場から、熱く思いの丈を語り、情報提供やアドバイスをした。

—ひきこもりの定義は「さまざまな理由で家族以外の交流を避け6カ月以上自宅に留まり続ける状態」などをいう。全国のひきこもりは、100万人以上とされており、そのうち中高年(40~64歳)は61万3千人(内閣府)で、高齢化に伴い80代の親が50代の当事者の面倒を見ていけない、「50-80問題」という危機的な状況に直面し、親子死に至った事例もある。

「ひきこもりに限らず、いろんな事柄で生きづらさを感じていることが多い。そんな時に大切なのは当事者、家族、そして色々な機関の関係者、専門の方の声を生かした体制作りが大事」「これから先、自分の子どものことを考えたら、避けて通れない問題。世の中をよくしていく手段は政治以外にいっぱいある。利益の追求をせず、ボランティアの皆さんのように、社会の本当に困っている人のために仕事ができるのは、行政・政治以外の人間」

—当事者が出てこられる居場所づくりが欠かせない。ただ、単なるスペースでなく最低限の生活機能(飲食、駐車場など)が必須条件。

「当事者と家族が車で通える人も、そういう手段がない人もある。行きたくても行けない。車で送迎してくれなければ来られないような事情にも配慮がいる」「居場所があちこちにたくさんあるほうがいいが、その前に、居場所に行けない人がたくさんいるのではないかということで、訪問することで家庭の中に風をおこしてあげる状況をつくるために、

訪問サポーターが必要。そのために行政の中で、そういう人を育てる話もあるようだ」「きびの会はズバリ“ひきこもりを支援する会”ということを確認にうたったほうが、困っている人は行きやすい。名称の冒頭にひきこもり支援という活動内容がストレートに伝わる方が、インパクトがある」

—会員が当事者や家族と対面し相談にのったり、アドバイスや情報提供をするボランティアのあり方についても意見が出た。

「ボランティアはいろいろな活動をするのではなく、知っていること、情報をつなぐということが一番大切」「市の職員は何でもいいから一つボランティアをすべき」「病院や日常生活の中にボランティアが入っていくような雰囲気をつくる。そうすれば閉鎖されているところが開放されるようになるのでは」—色んな話がでたが、活動を続けていくためには、やはり「きびの会」をもっと世間に知ってもらうことが重要と感じた。

夏の風物詩楽しむ ととろサロン・ソーメン流し

清涼感を得ながら大人から子供まで楽しめる夏にうってつけのイベント「ととろサロン・ソーメン流し」が8月24日(土)開催され、会員と会員の家族ら約30人が夏の風物詩を満喫しました。



この日は真夏日そのものでしたが、どこか爽やかな日和。例年のごとく、孟宗竹を縦割りにした半筒形の約10メートルの「とい」(水路)を作り、念のために雨よけの簡易テントも設営。

手延べ麺40束2キロがゆで上がったころ、天ぷらや夏野菜たっぷりのサラダなど十数品も並び、11時過ぎには「食べ方」スタート。ソーメンのつけ汁には、刻みのり、ネギ、ミョウガ、シソなどの薬味も入り、見るからに涼・美味感満載。参加者は汁椀をもってといに沿って並び、流れるソーメンを箸で器用につかみ、すすっていました。子どもたちは「冷たくておいしい」と夏の味を堪能。

午後は野上照子さんの腹話術があり、参加者の歓声に包まれました。